

内田樹

六二年のキューバ危機のときは第三次世界大戦開戦直前まで行っ
たのです。日本は敗戦国でしたので国際政治に関与できるような国力がありませんでした。日本の一般国民が何を思おうと、何をしようとして、それによって核戦争の勃発を食い止めることなんかできない。原水爆実験がつぎつぎに行われ、雨が降るたびに核実験で放出された**放射性物質が日本人の頭上にも容赦なく降り注ぎました**。そういう時代でした。日本だけではありません、五〇年代末から六〇年代にかけて、世界中のどこの国の人たちも同じように、深い無力感に蝕まれていたのです。

~~~~~

大気圏内核実験は、1940年代中ごろから開始され、1950年代後半から60年代前半にかけて盛んに行われました。

これらの核実験で生成した放射性物質は、北半球全体に拡散し、雨水とともに地表に降り続けました。これらを放射性降下物（フォールアウト）といいます。

~~~~~

二〇一二年の暮れからこの話は始まります。ご存じの通り、その年の総選挙で自民党が大勝して民主党政権からの奪権を果たしたわけです。そのとき安倍総裁は本気で改憲するつもりでした。野党時代の自民党改憲草案はネットで検索するとすぐに出てきますから、ぜひ一読しておいでください。自民党が改憲によってどのような社会を作ろうとしているのか、よくわかります。**基本的人権を限定し、行政府に権力を集中させるある種の非民主的な政体を作ることが自民党の目的です**。

世界を覆うグローバル資本主義のなかで、どの国でも、**あらゆる社会制度は「株式会社化」しつつある**。これがもう一つ日本社会の未来を見通す場合に君たちが採用しなければならないものの見方です。

日本では立法府の機能が空洞化し、行政府に権限が集中し、事実上の独裁体制が完成しつつあります。でも、この変化を多くの国民は「むしろ歓迎すべきこと」だと思っ
ているように見えます。なぜなら、**トップへの権限と情報の集中は株式会社の仕組みそのもの**だからです。

株式会社は、民主主義的なものではありませんし、もちろん立憲主義的なものでもありません。経営判断を下すに当たって、従業員の過半の同意を求めるような経営者はいませんし、創業者の遺訓だの定款の文言を引き合いに出して経営判断の妥当性について議論するような会社はありません。

だから株式会社では上位者にはそれなりの権限が与えられ、それなりの給与が支給され、彼らはそれなりの情報にアクセスできる。ランクが低い人びとは権限も情報も給与も限定されたものしか与えられない。平等も民主主義も表現の自由も株式会社にはありません。

・・・

人物の見識や器量はどうでもよい。金儲けがうまい人間こそが国家の統治者になるべきだという考えをブッシュはしており、そのような人物をアメリカの有権者が大統領に選んだということが重要なのです。二十一世紀はまさに「あらゆる社会制度の株式会社化・すべての指導者のCEO化」という流れとともに始まったのです。

RU11の一一校の一学年の定員は三万人ほどでしょうから、君たちの同学齢集団約一〇〇万人のうち三万人、三%ほどがそのカテゴリーに収まる。その中でもさらに競争と淘汰があって一%ほどが「エリート」として残る。

残りの九七%がいわゆる「グローバル人材」です。グローバル人材とは何かについて劇作家の平田オリザさんが卓抜な表現をしていました。グローバル人材育成というのは「ユニクロのシンガポール支店の店長を創り出すための教育のことだ」と。なるほどと思いました。たしかに、それがグローバル人材教育の具体的な達成目標なのです。英語ができて、タフなビジネスの交渉ができて、一日一五時間働けて、辞令一本で翌日から海外の支店や工場に赴任できて、何よりも低賃金を苦しめないこと。

いま日本の大学はそういう人間を毎年何十万単位で創り出すことを文科省と財界から命じられています。ですから、君たちがこれから大学で就活するとき、面接試験で必ずこう聞かれます。「あなたは今日辞令が出たら、明日から海外に行けますか?」。これに即答で「イエス」と答えなければ、君たちは採用されません。

絶望的な精神状態に追い込まれると「もう、雇ってくれるところならどこでもいい」ということになる。自己評価の低い人間は、採用する側からすれば、どれほど劣悪な雇用条件でも呑む労働者になる。規格化が進めば進むほど雇用条件は引き下げられる。これも理屈は簡単です。同じような能力を持った人間がひしめくわけですから、採用する側は「君の換えなんか、いくらでもいるんだ」という態度で臨むことができる。一番能力が高くて、一番賃金の安い求職者を雇うのは採用側の「権利」だという話がいつのまにか出来上がっている。

面接では「圧迫面接」というものがあります。求職者を追い詰めて、精神的にずたずたにするような質問で責め立てる。別にそれで何か教育的な効果を狙っているわけではありません。そういう質問で痛め付けられると就活生の自己評価が下がるからです。自分は思っていたより「使えないやつ」なんだと信じ込むようになる。全社が一斉に圧迫面接をすれば、就活生たちはどこの採用試験に行っても怯えて、採用者の顔色をおどおど窺うようになる。これは雇用条件を引き下げるきわめて効果的な方法なのです。だから、全社がこの仕組みを採用している。

経済成長する条件がないにもかかわらずあくまで経済成長モデルにこだわるなら、最終的に人間を収奪するしかありません。すべての価値の源泉は労働価値ですから。人間たちからいかに多くの収益を絞り出すか、それが経済成長論者たちにとって緊急の課題になる。高い能力をいかに安く使うか。その安い賃金でいかに多くの商品を購入させるか。それが企業の最大の関心事となります。とりあえずそのためには君たちをつねに不安な状態に置いておくしかない。

斎藤環

バイト先の冷蔵庫に自分が入った写真をツイートするなど、いわゆるバカッターという現象が流行ったことがありました。全世界から馬鹿にされ炎上騒ぎになりましたが、あれをやった人たちは「バカな行為」を承知の上で、仲間内で笑いを取り承認してほしいがためにやったのでしょう。承認稼ぎが暴走すること、これがバカッターのメカニズムです。

それからもうひとつ、坂口恭平という若いアーティストのことばです。彼は自著の中で「自分のしたいことをしてはいけない」と書いています。おもしろいですね。ふつう大人はしたいことを見つけなさいとか、自分が進みたい方向に進みなさいと言いたがりますが、彼は絶対そんなことを言いません。じゃあどうするのか。「自分にしかできないことをしてください」。このことばの意味はみなさんそれぞれで考えていただければと思います。

中井さんによれば、学校の教室で「いじめ」関係が成立する過程は、三段階に分かれるという。まず被害者は「孤立化」させられる。加害者が、被害者がいじめられるべき理由を言いふらして、どんどん味方がいなくなる。次いで、被害者の反発が厳しく罰せられることで「無力化」がなされる。最後に、被害者も加害者の存在を必要とするようになる「透明化」の段階に至る。「透明化」に至って、いじめの存在は周囲から完全に隠蔽され、誰にも見えなくなってしまうのだという。

鹿島茂

それに対して、日本、韓国、ドイツ、スウェーデンといった国の家族形態は「直系家族」といいます。これは、子どもが成長して生計を立てられるようになっても、親はそのうちの一人の子とも同居するという家族形態です。結婚して子どもができて、お

じいさん、おばあさんと同じ一層根の下に住む。他の子供は結婚すると家から出ていきます。こういうタイプの「親・子・孫」の縦型の家族が「直系家族」と呼ばれる形態です。

日本には「二世帯住宅」というものがありますね。これは、もともと直系家族だったものが核家族的に変化したけれど、完全な核家族にはなれないということで、便宜的に発明された住居形態です。したがって、フランスやイギリスには、そもそも二世帯住宅という言葉がないし、そういう住居もない。そんな考え方はないからです。子どもが独立したら、同じ町に住むことはあっても、隣には住まないし、ましてや同じ屋根の下には住まないのです。

理性とは「正しく損得勘定を働かせる」こと

では、この「理性」とは何でしょうか。あからさまに言ってしまえば、まさに先ほどの「自分にとって一番何が得か」ということに他なりません。理性＝正しい損得勘定、と極端に言い切っても悪くないと思います。理性が万人に等しく分配されているなら、本来、誰でも正しく理性を働かせて正しい損得勘定ができるはずなのです。

「最初はグー」で始めると、次にパーを出す人が多い。なぜだかわかりますか？ 「最初はグー」だと、相手のグーが頭に入っているから、人は無意識のうちに「グーに勝てるのはパーだな」と考え、とっさにパーを出してしまうことが多いのです。だから、統計を取ると、「最初はグー」の次は二人ともパーを出して「あいこでしょう」になる比率が高いのです。

池上彰

「自分は何も知らない」と思うこと

こうしていろいろなことを知るたびに、私が一番思うのは「ああ、自分は何も知らないんだろう」ということです。「無知の知」という言葉があります。自分は何も知らないのだということに気づく。これが、実はとても大切なことなのではないかと思うんです。

中学生で因数分解を習いますね。これもなぜやるのかよくわからなかった。ところがあるとき、「物事を整理してわかりやすく伝えるのは、因数分解そのものなんだな」と気がついたんですね。因数分解は数列や数式のなかで共通したものを見つけて一度外に出し、それ以外のものを括弧で括ることです。これはある複雑な物事や事象を人々にわかりやすく説明するときと同じです。いろいろな要素のなかから共通したものを見つけて、それを最初に出して説明しようとする。まるで同じなのです。

私の父親は八八歳、つまり米寿を過ぎて急に体が弱ってしまって寝たきりの生活になりました。ところがある日、新聞広告を見ていた父は『広辞苑』の第四版が出たらしいから買ってきでくれ」と私に言うのです。『広辞苑』はとても分厚い国語辞典ですね。「寝たきりなのにどうするんだろう？」と思いましたが、たまには親孝行をしようと買い求めて父に渡しました。

すると、重たい辞書を枕元に置いて、読み始めるんです。私は「なんという知識欲だろう！」とたまげましたね。八八歳を過ぎて寝たきりになってもなお『広辞苑』を読み続ける。なんという好奇心、向学心だろうと頭が下がる思いでした。

それから間もなく父は亡くなりよした。